

## 留学生の文章産出時における辞書使用 —その実態調査の実施に向けて—

鈴木智美

東京外国語大学留学生日本語教育センター

tmsuzuki@tufs.ac.jp

### 1. 研究の目的

本研究では、世界各国・地域より日本の大学に留学し、日本語を学習している学習者（特に中級レベル以上の者）を対象に、その文章産出時における「辞書使用」についての実態調査を行い、「留学生は、言いたい日本語をどう見つけるのか」を実証的に探ることを目的とする。

具体的には、東京外国語大学「全学日本語プログラム」（東京外大における非正規生を対象とした全学的な日本語プログラム）の受講者<sup>1</sup>を対象に、文章表現の際にどのような辞書をどのように使用しているのかについて、量的調査（アンケート調査）、および質的調査（インタビュー調査）を組み合わせ、調査を実施する。日本語教育学分野における学習リソースの充実に向け、留学生の辞書使用の実態についてのまとまった規模の基礎的かつ有意義なデータの提供を行い、日本語学習者が文章表現を行う際に“言いたい”日本語の表現を的確に見つけるために、今後「辞書のできることは何か」を明らかにすることを目指す。

### 2. 研究の背景

日本語学の分野では、国広哲弥『理想の国語辞典』（1997年）なども刊行され、日本語学習者も視野に入れた日本語辞書の充実が指摘されるようになって久しい。日本語教育の分野においても、姫野昌子監修『日本語表現活用辞典』（2004年）など、日本語学習者向けにコロケーション（連語）情報を豊富に載せた、特色ある辞書も刊行されるようになっている。

また、上記「全学日本語プログラム」受講者による2009年度の授業評価アンケートでは、回答者の75%（春学期）および79%（秋学期）という多くの者が、学習リソースとして「辞書をよく使う」と答えている（「全学日本語プログラム学生アンケート」集計結果（2009年度春学期・秋学期））。「辞書」は、学習者にとって身近な学習リソースとなっていることがわかる。

しかし、ここで学習者が使用する「辞書」とは、一体どのようなものなのだろうか。また、学習者はそれをいつ、どのように使っているのだろうか。日本語学習者の「辞書」使用の実態については、実は個々の教員が授業その他で目にするような個別の場合を除き、その詳細は包括的には明らかにされていない。

### 3. 辞書の使用が引き起こす不自然な表現

東京外国語大学留学生日本語教育センターにおいては、「JLPTUFS 作文コーパス」（上記「全学日本語プログラム」を受講する日本語学習者の作文データベース）の構築に取り組んでいる（詳細については鈴木・中村・韓（2010）参照）。この作文コーパスでは、2009年度（春・秋学期）には計約1,070件の作文データが収集された。授業において、あるいは宿題として、ある程度の分量の文章表現タスクが課される際、その実施条件として、時間制限や字数・文体等の指定の他に「辞書使用可」という条件が設定されることも多い。

しかし、上記コーパスで収集された初中級レベルの作文（計351件）<sup>2</sup>について見たところ、学習者は文章を産出する際、辞書を使用してもなお「言いたい表現」が的確に探し出せないという現状があることがうかがわれた（鈴木（2010））。さらに言えば、辞書の使用が学習者の不自然な表現を引き起こしているのではないかと思われる点も見られた。

初中級レベルの作文に観察される不自然な表現には、文法的な誤りの他に、鈴木（1999, 2002）で観察されたのと同様に、やはり「不適切な語の使用」という語彙・意味的な問題が見られる。当該の語の意味が的確にとらえられずに使用されているものや、類義表現の選択、コロケーション（連語）の形成などに関わる問題が観察される<sup>3</sup>。

これらの不自然な表現を「辞書使用」の観点から見直してみると、そこには学習者の母語あるいは第二言語等からの辞書を介したいわば「直訳」により引き起こされていると考えられるもの、また既存の辞書からは句単位の的確な表現を探し出すことができないという問題から生じていると思われるものが見られる。以下の表1に、そのような「辞書使用」の問題により引き起こされていると思われる不自然な表現の例を、鈴木（2010）より抜粋して示す。

学習者は日本語で文章を書く際、母語あるいは第二言語（英語等）において頭に浮かんだ語を辞書で引き、その日本語訳を調べ、文を作成するということが見られる。その文において中心的な概念をなす語が日本語で思い浮かばない場合に、まず辞書で訳語を調べ、それを文中にあてはめて文を構成する。

しかし、通常辞書では当該の語の多義的な意味にしたがって、複数の日本語の訳語が並べられている。その際、学習者がその中のどれを選択すればよいか、的確な判断ができないことが、辞書に使用が不自然な表現を生み出してしまう一因としてあると思われる。

### 4. 辞書の改善の可能性

上記のような問題を引き起こすのは、辞書に挙げられている例文が十分ではないか、あるいは辞書が日本語学習者の目的や日本語のレベルに合っていないなどの理由が考えられる。学習者がよく使用している電子辞書や、携帯電話のアプリケーションとして搭載されている辞書などが、日本語学習者を対象に作成されたものではないこともあるだろう。また、学習者の母語と日本語

との対訳辞書が電子辞書等に搭載されていない場合には、学習者は便宜的に英語・日本語の対訳辞書を使用するという方策をとることが観察される。このことが不自然な語の選択に何らかの影響を与えていないかについても、今後の調査で確認する必要があるのではないと思われる。

表1 辞書使用の観点から見た学習者の語彙・意味的な不自然な表現の例

学習者の表現（不自然な箇所を下線） （[ ] 内は本稿執筆者の補足）	想定される自然な表現	辞書使用が影響していると思われる点
せかいのかんきょうの <u>会話</u> がありました	へについての会議/会談/協議	“talk” の訳か
百年前の <u>場面</u> はとても悪かった	状況	“situation” の訳か
人生の中で彼にはいろいろなし <u>しょう</u> がありました	問題がありました/ 困難にぶつかりました	“difficulty” “trouble” 等の訳か
日本の都市は <u>ちゅうみつ</u> です	込んでいる/人口密度が高い	“density” から 探した表現か
夜に町は <u>活発</u> になります	にぎやかに	“lively” の訳か
交通の <u>頻発</u> が高いので	(電車や地下鉄の) 本数が多いので	“frequency” の訳 からか
科学と芸術は <u>開発</u> した	発展した	“develop” の訳か
[地震で] 多くの人は <u>失踪</u> した	行方不明になった	“missing” の訳か
[切符を買う時] 線に立たなければなりません	(一列に) 並ばなければ なりません	“stand in a line” の 逐語訳か
水の上で <u>きれいなはんえい</u> があった	水の上で <u>きれいに映</u> っていた	“reflection” の訳か
きれいな見通しを <u>きょうじゅ</u> した	とても見晴らしがよかった	“enjoy” の訳か

また、学習者は辞書によって、1語単位では目指す言葉の日本語訳を見つけることができるかもしれない。しかし、コロケーションおよび構文までを含め、語を超えたレベルにおいてそれを的確に使用することにつまずいているようすがうかがわれる。辞書には、句単位あるいは構文単位での的確な表現へと、学習者を導くような何らかの工夫が必要ではないかと思われる。

## 5. 今後の調査スケジュール

2010年度春学期中にパイロット調査を行った上で、同秋学期11月～12月にアンケート調査を、1～2月にインタビュー調査を行う予定である。また、研究の次段階においては、日本国内の第二言語としての学習環境のみならず日本国外での外国語としての学習環境において、学習者がどのような辞書をどのように使用しているかという点についても調査を行うことが課題となってくるだろう。日本国内との比較を行うことにより、学習環境の違いを視野に入れた、求められる辞書のあり方を探ることができればと考える。

## 付記

本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金（平成22年度挑戦的萌芽研究「留学生の文章産出時におけ

る辞書使用の実態調査—「言いたい日本語はどう見つけるか」研究代表者：鈴木智美、課題番号：22652047)の助成を受けて行われている。

## 注

- 1) 受講対象者は、交流協定校からの交換留学生(短期留学生)、日本語・日本文化研修留学生、教員研修留学生、国費および私費の研究生、予備教育課程の国費研究留学生等である。入門から超級まで8段階のレベルがあり、受講者総数(履修登録者数)は2010年度春学期は206名、出身国・地域は、アジア、中東、北米、中南米、欧州、太平洋、アフリカと世界各国・地域にわたっている。
- 2) 初中級レベルの学習者は、初級の文法・語彙等を一通り学習し終えた段階であり、その表現したい内容や母語による知的な思考力のレベルと、身に付けている日本語の知識および運用力との間にギャップがあることも多く、辞書を頼りに難しい表現を試みがち傾向がしばしば見られる。
- 3) 例えば「人気が増える(→高くなる)」「手数料を使う(→払う)」「生活が困った(→苦しかった)」などのコロケーションに関する不自然な表現、「風邪をひいた時便利だ(→役に立つ/よく効く)」「いつも他の人を手伝っている(→助けている)」「[田舎で]私はいつも多忙じゃない(→少し退屈だ)」「日本人は責任がいい(→責任感がある)」「失意に生きた(→がっかりした)」など、類義表現を含めた語の意味の的確な理解、および慣用的な言い回しに関係する不自然な表現が見られた。

## 参考文献

- 国広哲弥(1997)『理想の国語辞典』大修館書店
- 鈴木智美(1999)「意味的な誤用に見られる主な傾向—慣習的に定着した表現および類似の表現に関わる誤り—」平成8年度～平成10年度科学研究費補助金(基盤研究(A)(1))研究成果報告書(研究課題番号 08558020)研究代表者:大曾美恵子(名古屋大学大学院国際言語文化研究科教授)『日本語学習者の作文コーパス:電子化による共有資源化』pp. 131-145(研究協力者)
- 鈴木智美(2002)「2000年度中級作文に見られる語彙・意味に関わる誤用—初中級レベルにおける語彙・意味教育の充実を目指して—」東京外国語大学留学生日本語教育センター『留学生日本語教育センター論集』第28号 pp. 27-42
- 鈴木智美(2010)「辞書の使用が引き起こす学習者の不自然な表現—『JLPTUFS作文コーパス』の作文から見えてくること—」『2010世界日本語教育大会(ICJLE)予稿集』
- 鈴木智美・中村 彰・韓 金柱(2010)「JLPTUFS作文コーパスの構築について—全学日本語プログラムで学ぶ日本語学習者の作文データベース化」『東京外国語大学センター論集』第36号 pp. 123-133
- 東京外国語大学留学生日本語教育センター「全学日本語プログラム」運営委員会(2009)「全学日本語プログラム学生アンケート」集計結果(2009年度春学期・秋学期)
- 姫野昌子(監修)(2004)『日本語表現活用辞典』研究社